

高専生のスポーツライフスタイルと それに基づく体育科アウトカムズの設定

本間 浩二 丸山 富雄

キーワード：学生のスポーツライフスタイル，モデルコアカリキュラム，到達目標

The sport lifestyle of the students of National Institute of Technology, and setting of the achievement goals of the physical education based on their actual circumstances.

Koji Honma Tomio Maruyama

Abstract

Over the six years from 2008 to 2013, the survey was carried out on the sport consciousness and activities of students of National Institute of Technology, Tsuruoka College, in order to research and analyze the 4 aspects such as "life and sports", "sport participation", "reasons for playing sports" and "the socialization factor of sports."

Many students consider that sports contribute to "building up friendship", "foaming a human character" and "knowing each other". Although the frequency of their doing exercises and sports is not very low as a whole, it was found that there were more than a few students who were engaged in sports only in their PE classes and sports events, with the rate 16.7% of the whole and 24.1% in some department. Regarding sports, there are plenty of students "who feel a sense of fulfillment", "who would like to do sports regularly", and "who would like to aim for the technical improvement". There is a tendency that they are not so eager to get information on sports by looking through newspaper articles or TV sports program columns, and the like. A number of students expect "pleasure" and "the promotion of health and physical strength" from sport activities. The self-evaluation on their physical strength and athletic ability is low. Mentioned above were the main facts found in the survey.

In the meantime, the National Institute of Technology presented the model core curriculum guideline, which includes the lowest levels that every student must achieve and attain. In accordance with the guideline, therefore, I thoroughly examined every one of the achievement goals of the PE subject. First of all, the students' abilities required in PE classes were verified in consideration of their actual conditions. After that the achievement targets were set up on the basis of the guideline and the students' situations. It was found that there were a lot of relationships between them. After all the achievement goals were set up in conformity with the students' actual circumstances and the guideline.

This research was carried out in correspondence with the movement toward the goal resetting required by the National Institute of Technology, and the facts found in the survey can be reflected on the students and the teachers. Therefore, it is concluded that this survey is meaningful.

Keywords : sport lifestyle of the students, model core curriculum, achievement goals,

I. 緒言

1. 研究の動機

鶴岡工業高等専門学校（以下「鶴岡高専」と略す）の学生は、将来実践的エンジニアとして社会貢献することを目標としている。彼らの運動能力は全般的に高いとはいえず、体育授業では、個々の活動意欲にも差が見られる。鶴岡高専生が、生活の中でどのようにスポーツに接し、スポーツに対してどのような考え方をもち、どれくらいスポーツ活動を行っているのか、その実態を理解することが、より良い体育授業の組み立てや学生に対する望ましいアプローチにつながるのではないかと、という仮説からこの研究に着手した。

高等専門学校（以下「高専」と略す）のカリキュラムは、従来各高専の理念に基づいた工夫・改善により、各校の独自性を維持しつつそれぞれに構成されており、基礎となる統一的基準は存在していなかった。一方、国際的には高等教育の質保証の観点から、とりわけ高度専門職業人養成に関して学習到達度の目標を作成する動きがあり、工学分野の技術者についても到達目標の設定に向けた検討が進められている。

国立高等専門学校機構（以下「高専機構」と略す）が現在進めている『モデルコアカリキュラム導入』は、国立高専のすべての学生に到達させることを目標とする最低限の能力水準・修得内容である「コア（ミニマムスタンダード）」を示すとともに、より高度な社会的要請に応じて高専教育のいっそうの高度化を図るための指針となる「モデル」を提示することを意図している。

以上のような流れをふまえ、鶴岡高専でも体育科授業における到達目標を再設定し、授業を通じて学生のどのような資質伸長を目指すのか、検討していかなければならない。そのうえで、鶴岡高専生のスポーツに対する考え方やスポーツに対する接し

方の実態把握は有効と考える。高専機構が示すガイドラインに、鶴岡高専生のスポーツ活動やスポーツに対する意識の実態を反映させて、最終的には、鶴岡高専体育科新シラバスにおけるアウトカムズ（到達目標）を完成させることを目標としてこの研究を進めていく。

2. 研究の目的

本研究では、高専生のスポーツに対する意識や行動の現状を把握し、分析することを目的として研究を進める。すなわち、高専生のスポーツに対する価値意識はどの程度なのか、スポーツに関わる行動が高専生の実生活においてどのような位置に置かれ、また実際にどの程度のスポーツ活動に参加しているのか、さらには、スポーツへの社会化要因についての実態を含めて調査する。

そこで得られた分析結果をもとに、体育授業におけるアプローチの在り方を整理し、さらに、それを高専機構が提示するモデルコアカリキュラムが示す指針に照らし合わせ、鶴岡高専体育授業におけるアウトカムズを導き出していく。

3. 研究の意義

調査対象は、鶴岡高専生に限定されるが、5年間の一貫教育を施す高等専門学校という特色ある高等教育機関の学生が、スポーツに対してどのような意識を持ち、また、どの程度スポーツ活動を行っているか等の実態を把握することで、今後の授業運営や個人的カウンセリングに活かすことができると考える。さらに、高専機構が示すモデルコアカリキュラム指針に従い、アウトカムズの再設定を進めるうえでも、この研究によって得られる鶴岡高専生のスポーツに関わる諸実態は大きな参考となる。したがって、この研究は教育現場への還元という実践的な意義を有しているといえる。

Ⅱ. 研究方法

1. 調査の対象と調査時期および方法

調査は、鶴岡高専の1年生を対象とし、質問紙法（アンケート）によって行った。

調査期間と調査時期は、平成20年から平成25年にかけての6年間で、1年生が高専における学生生活に慣れ、生活パターンも落ち着いたと思われる10月～11月（後期カリキュラムスタート直後）の間に設定した。本校は、本科1学年が、機械工学科40名、電気電子工学科40名、制御情報工学科40名、物質工学科40名で構成されているので、6年間の調査によってアンケート対象学生（サンプル数）は単純計算では各学科240名で総数が960となる。但し、アンケート実施当日の出欠状況により、アンケート対象学生人数には多少のばらつきがあり、実際のサンプル数は機械工学科237名、電気・電子工学科239名、制御情報工学科が237名、物質工学科235名、総数948名である。

2. 調査内容

「高専生の生活とスポーツ」の実態を把握するため、次の4つの側面から調査を行った。

- 1) 学生生活とスポーツ
- 2) スポーツ参与
- 3) スポーツ観
- 4) スポーツへの社会化要因と現在の実態

Ⅲ. 結果

1. 高専生の生活とスポーツ

高専生の生活とスポーツに関して、学生生活における優先順位、スポーツ評価、スポーツ関係支出といった3つの側面から検証したが、その結果を総括すると、鶴岡高専生にとって、運動やスポーツ活動は、生活において、学業やその他の活動（交友関係や文化活動等）の次に位置づける学生が多いことが明らかとなった。

また、スポーツ評価では、学科間、経年的に僅かな差は生じているが、それぞれの項目の平均値は、回答得点配分の中央の値を上回っていることから、スポーツを中レベル以上に評価し、スポーツの意義を認めていることがわかった。

さらに、スポーツ関係支出に目を向けると、全体的には低額支出の傾向にあり、スポーツに関連する支出が全然ない、とする学生が4割近くにのぼる。

これらの傾向は学科別、経年的には若干の差は生ずるものの、ほぼ同様の結果を示している。

2. 高専生のスポーツ参与

高専生のスポーツ参与状況を把握するため、ここでは、直接的スポーツ参与として、現在の運動サークルへの所属率・スポーツ実施程度の2側面から、また、間接的スポーツ参与として新聞のスポーツ欄の閲読、TVのスポーツ関係プログラムの視聴、および評価的スポーツ参与から、それぞれ検証を行った。

その結果、全体では6割を超える学生が学内の運動サークルに所属しており、その中でも、特に物質工学科は7割を超える比率を示して他学科を上回った。逆に、制御情報工学科については、学内運動部所属率が5割に満たず、他学科に比べ低い傾向にあることがわかった。

また、運動・スポーツの実施程度では、「週に5～6日運動をしている」という積極的な学生が31.6%、「週に3～4日運動をしている」という学生が19.1%、「ほとんど毎日運動している」学生が9.6%で、全体の6割を超える学生が積極的に運動をしていることがわかった。しかし、制御情報工学科は、積極的に運動している学生が5割に満たず、他学科に比べ、スポーツ・運動の実施程度が低い傾向にあった。

間接的スポーツ参与に関しては、新聞の

スポーツ記事閲読では全体の約6割が「ほとんど読まない」と回答し、TVスポーツ番組視聴においても「どちらかという見ない」「ほとんど見ない」の2項目で過半数を超え、全体的に消極的な傾向にある。

評価的スポーツ参加においては、制御情報工学科がやや低い傾向にあるが、平均値からみると、評価は高い傾向にあるといえる。

3. 高専生のスポーツ観

全体では「楽しさや満足感を味わうために行く」(遊戯主義)が41.1%と最も多く、次に「健康づくりや体力の保持・増進のために行く」(身体・人格形成論)が37.1%であった。この2つのスポーツ観で78.2%をしめた。

以下、「勝つことを目指して行く」(勝利主義)13.4%、「仲間作りや親睦を深めるために行く」(社交・連帯形成論)6.3%であった。

この傾向は、上位2つのスポーツ観については、電気・電子工学科、制御情報工学科、物質工学科とも同じであるが、機械工学科だけは、身体・人格形成論が最も高い比率を示した。また、勝利主義においては、他学科に比べ物質工学科が高い数値を示し、制御情報工学科が低い数値を示した。

経年的には大きな差は見られなかった。

4. 高専生のスポーツへの社会化要因と実態

高専生のスポーツへの社会化要因と現在の実態を把握するため、ここでは、両親のスポーツ関心と、家族の励ましから、そして、体力の自己評価、運動能力の自己評価という側面から検証を進めた。

その結果、両親のスポーツ関心では、父親・母親ともに「やや関心があった」「大いに関心があった」とする学生が6割を超え、特に父親がスポーツへの関心を強く示して

いることがわかった。

家族の励ましでは、スポーツ活動に対して「非常に賛成」「やや賛成」とする者が9割以上を占め、両親のスポーツ賛成度は明らかに高い。体力の自己評価では、7割を超える学生が「自信がない」「あまり自信がない」と全体的に低く評価している。運動能力の自己評価でも、6割以上の学生が低い評価をしていることがわかった。

IV. 考 察

1. 分析結果の体育授業への活用

ここまで把握できた鶴岡高専生の実態を、体育授業における配慮事項に反映させて整理してみる。つまり、学生の実態を受けて、体育科の授業ではどのようなアプローチが有効であるか、それぞれの項目別に考察を加えていく。

分析結果に因れば、各項目における学科間の相違や経年的な差はほとんど見られなかったことから、全体の傾向を主な参考資料としながら考察を進める。

(1) スポーツ活動に対する評価の実態からの考察

生活におけるスポーツ活動の優先度は低く、優先1とする学生は全体の9.7%に過ぎないが、スポーツに対する価値観レベルを問う質問では、全体的に高い数値を示し、特に「仲間が増える」「人間形成に役立つ」「お互いを知るのに役立つ」「学生生活に不可欠」といった項目で高い数値を示している。つまり、スポーツ活動は、人間形成に役立つ、仲間との交流を深める手段として価値があることを認めているためと思われる。そのため、「学生生活に不可欠」でも高い数値を示しているのだろう。

この実態の体育授業への反映を考えた場合、球技等の集団競技を多く取り入れ、グループ毎に行動をする場面を増やすことで仲間との接点を増やすことができる。また、卓

球やバドミントン等の個人競技であってもダブルスやリーグ戦形式のゲーム等を導入し、他の学生との交流場面を意図的に設定する等の対応が考えられる。さらに、種目に関わらず、お互いのパフォーマンスについて相互にアドバイスし合うような形態も他との関わりをつくるうえで有効と思われる。

(2) スポーツ参加の実態からの考察

校内運動サークルに所属する学生が6割を超えること、また、スポーツ実施程度の調査結果でも、比較的積極的に運動・スポーツを実施している学生が多いことを考えると、スポーツ参加レベルは決して低くはないといえる。しかし、運動・スポーツの実実施頻度が「体育と体育授業のみ」とする学生が16.7%存在する。

スポーツ実施頻度が低い学生のために、授業における運動量の確保をねらわなければならない。この点では、学生の健康に配慮し適度な休憩等も大切にしつつ、必要以上のインターバルが入らないような練習ドリルの紹介や、ゲーム形式の場面では、チーム数やゲーム時間設定を考慮して、参加ローテーションの頻度を上げるような運営の工夫が必要となろう。同時に、日常のスポーツ活動の少ない学生のためにも、ストレッチ等の準備運動を強化し、ケガの防止にも努めなければならない。

また、新聞のスポーツ記事閲読やTVのスポーツ番組視聴の間接的スポーツ参加が低いことから、運動・スポーツに対する興味や関心は決して高くはないと推察できる。この点では、授業導入時の説明をわかりやすく丁寧に行い授業に対する興味や関心を高める努力はもちろん、実践中の学生に対して、適宜賞賛や激励の声をかける等、意欲を高めるための働きかけが重要になる。さらには、学生個々に対するアドバイスやグループに対するアドバイス等、グループ

や個人のレベルに合わせた配慮も必要になると思われる。

(3) スポーツ観の実態からの考察

スポーツを実施する理由として、最も比率が高いのが楽しさや達成感を味わうためとする遊戯主義(41.1%)、続いて健康作りや体力の保持増進のためとする身体・人格形成論が37.1%、そして、勝つことを目指して行う勝利主義が13.4%、仲間作りや親睦を深めるためとする社交・連帯形成論が6.3%の比率を示した。

楽しさを感じさせるためには、各競技の特性を学生に知らせ、競技意図を明確にすることが必要となる。つまりは、授業の導入段階で丁寧な指導をすることが肝要であろう。また、スキル練習の内容や組み立てにも工夫を加え、学生が興味を持ち、楽しみながら実践できるような配慮も大切となる。同時に遊戯主義にのめり込むあまり、ルールやマナーに対する意識が疎かになる懸念もあるので、ルール遵守を促す働きかけや、規律を失するような雰囲気にある場合は、全体に対して注意喚起するような場面も設定すべきと思われる。同時に、楽しく実技に向かうためには、ケガ防止の観点から、準備運動の徹底も必要となる。

健康作りや体力の保持増進のために運動・スポーツをするという観点からは、前述(2)同様、運動量の確保や準備運動の徹底で対応するとともに、トレーニングの意義や効果について説明を加える等、適切な情報提供により学生の興味・関心を引くような取り組みも大切である。さらに、保健授業でもスポーツ活動の身体に及ぼす効果や健康づくりに関連する情報を積極的に紹介し、学生自身の生活に活かすことができるような働きかけをすることも必要だろう。

社交・連帯形成論を実施理由とする学生が6.3%と低い比率ではあるが、(1)のスポーツ評価実態からの考察でも触れたように、

運動・スポーツをすることで、「仲間が増える」「お互いを知るのに役立つ」と考える学生が多いことから、前述(1)と同じアプローチも考えられる。

評価的スポーツ参与の調査結果では、「運動やスポーツをした後は充実感を感じる」「継続的に運動がしたい」「運動技術の向上を目指したい」という項目で高い数値を示しているが、この点での対応では、運動量の確保とアドバイスの工夫によって対応できる。

(4) スポーツへの社会化要因の実態からの考察

ここでは、体力や運動能力の自己評価が低いことに着目する。体育授業において、自信を持たずに積極的に活動できない学生に対しては、激励の声かけや個別アドバイス等で対応し、意欲喚起を図り、取り組みに努力する姿勢がうかがえる場合は、賞賛の声かけを行い、本人の自信構築に繋げていく。また、体力向上に向けた取り組みとしては、運動量の確保や準備運動の徹底、トレーニングの意義や効果の適切な情報提供等で働きかけていく。

以上、学生の実態に基づく授業アプローチのキーポイントとして以下5項目をあげることができよう。

- 仲間との交流
- 運動量の確保
- 規律の維持
- スポーツ活動の意義
(競技特性の理解促進)
- 意欲の喚起

2. 分析結果と鶴岡高専体育授業のアウトカムズ

- (1) モデルコアカリキュラムが示すガイドライン
モデルコアカリキュラムは、技術者が有

すべき能力として「分野共通で備えるべき基礎的能力」「分野別の専門的能力」「分野横断的能力」の3つに大別されている。

その中の「分野共通で備えるべき基礎的能力」では、数学、自然科学、あるいは、人文・社会科学(国語、英語、社会)について、到達レベルの具体的なモデルが示されている。また、「分野別の専門的能力」では、分野別の専門工学、分野別の工学実験・実習能力、専門的能力の実質化に分類され、それぞれの到達レベルのガイドラインが示されている。

体育に目を向けてみると、体育実技に特化した具体的な到達レベルの提示はなされていない。鶴岡高専では、他高専の先導的な取り組みを参考にしながら、モデルコアカリキュラム・学科再編実行委員会との意見交換を重ね、「分野横断的能力」を体育のガイドラインとして選定することとした。つまり、体育の場合、その学習内容に適合する具体的な指針が示されていないため、学習、すなわち体育授業に向かう態度や姿勢といった側面に着目するという観点から、汎用的技能や態度・志向性の到達目標が示されている「技術者が備えるべき分野横断的能力」をその対象とする、ということである。この「分野横断的能力」は、定型化された科目を示すことが困難であるため、「モデル」となる先導的良好事例の紹介を中心としているものであり、体育科が対象とすべき項目として、この分野を採用することは適切な判断と考える。

汎用的技能には、コミュニケーションスキル、合意形成、情報収集・活用・発信力、課題発見、論理的思考力が下位項目としてあげられ、態度・志向性(人間力)には、主体性、自己管理能力、責任感、チームワーク力、リーダーシップ、倫理観(独創性の尊重、公共心)、未来志向性・キャリアデザイン(イノベーション、アントレプレナー)が下位項

目としてあげられる。

モデルコアカリキュラムは、決して具体的な教科・科目の名称や内容を画一的に指定しているものではなく、各学校において工夫されることが期待されているものがある。したがって、これらセンテンスに含まれるニュアンスがアウトカムズに反映されることが肝要点であり、文言すべての引用が求められてはいない。また、すべての項目を対象にするのではなく、各学校における事情、すなわち、授業形態や他教科との関連性等から考慮し、必要となる項目や対応可能な項目を選定し、学生にわかりやすく提示することが求められるものである。場合によっては、項目を複合して対応することも可能である。

(2) 分析結果とアウトカムズの検討

ここでは、分析結果から導き出された体育授業におけるアプローチの諸項目と、高専機構が示すガイドラインからピックアップしたセンテンスを照合させながら「学生に求められる資質」の整理を進める。そして、体育科において学生に修得させる能力や到達させる目標、すなわち、アウトカムズの設定に近づけていく。

「仲間との交流」については、集団種目やペアを基盤とする種目の採択により、仲間との交流場면을意図的に増やすことで対応するが、ここで学生に求められるのは「コミュニケーションスキル」である。相手の意見を聞く、自分の意見を伝えるうえでは、他者との協調、すなわち「チームワーク」に対する意識・態度も問われてくる。さらには、グループの一員としての「責任感」も重要となるだろう。また、他者の意見を傾聴するためには「自己管理能力」の発揮や「合意形成」する姿勢も要求される。

「運動量の確保」については、実技活動時間を十分に提供することで学生の充実感に繋げていくことをねらうが、ここで学生に

求められるのは、自分の持つ能力を発揮して活動に取り組むという「主体性」である。さらに、常に課題を見出し、解決行動に向かう「課題発見」の側面も要求される。また、学生の立場として、授業に大きなマイナス影響を及ぼす行為を戒める必要があることから「責任感」も大切なファクターとなる。バスケットボールやバレーボール等の集団種目に取り組むのであれば、チームのために自分を律することも求められるため「自己管理能力」「コミュニケーションスキル」も必要になる。

「規律の維持」においては、競技を楽しむために、ルール遵守や規律保持のための指導を適宜取り入れることで対応するが、ここでは、自らを律する「自己管理能力」と授業に大きなマイナス影響を及ぼす行為を戒める「責任感」、そして、他者との協調も必要となることから「チームワーク力」も求められる。また、ルールに則った行動には、必要な情報の適切な収集能力や情報発信モラルの遵守意識も求められることから、「情報収集・活用・発信力」といった面も問われてくる。加えて、模範となる行動を示すという捉え方から「リーダーシップ」も必要とされる。

「スポーツの意義(競技特性の理解促進)」では、競技を楽しむためのポイントの明確な提示や競技特性の理解を促す働きかけを強化することで対応するが、ここでは、必要な情報収集と知識の活用が求められるので「情報収集・活用・発信力」が必要となる。また、競技に対する楽しみを見出すためには、事象の本質を理解することも大切になることから「論理的思考力」も要求される。同時に、自己の課題を見出し解決行動に繋げるための「課題発見」の側面も重要となる。加えて、ケガをせずにスポーツに向かうためには準備運動に真摯に取り組む「自己管理能力」が問われてくる。競技特性によって

は、「チームワーク」に対する意識レベルが問われ、競技を楽しむためには自分の長所を活かすべく時宜を得た行動を必要とする意味で「主体性」が要求される。さらに、競技ルールを遵守して活動を楽しむという意味では「責任感」や「倫理観」も大切な資質となる。

「意欲の喚起」では、指導者からの賞賛や激励の声かけや個人・グループのレベルに合わせたアドバイスで対応するが、ここでは、学生が声かけやアドバイスに対して自分自身の行動を考え対処するという「自己管理能力」や働きかけに対して望ましいリア

クションを示すために「主体性」が要求される。さらに、グループの仲間との交流においては「コミュニケーションスキル」も重要なファクターとなる。集団での行動を共同作業と捉えれば「リーダーシップ」も必要となり、他者との協調姿勢という「チームワーク力」も資質として求められる。

ここまでの考察から、学生の実態に基づく授業アプローチ下において学生に求められる能力・資質の諸項目と、高専機構が策定したモデルコアカリキュラムにおける分野横断的能力の「態度・志向性」と「汎用的技能」に記されている学生に求められる能

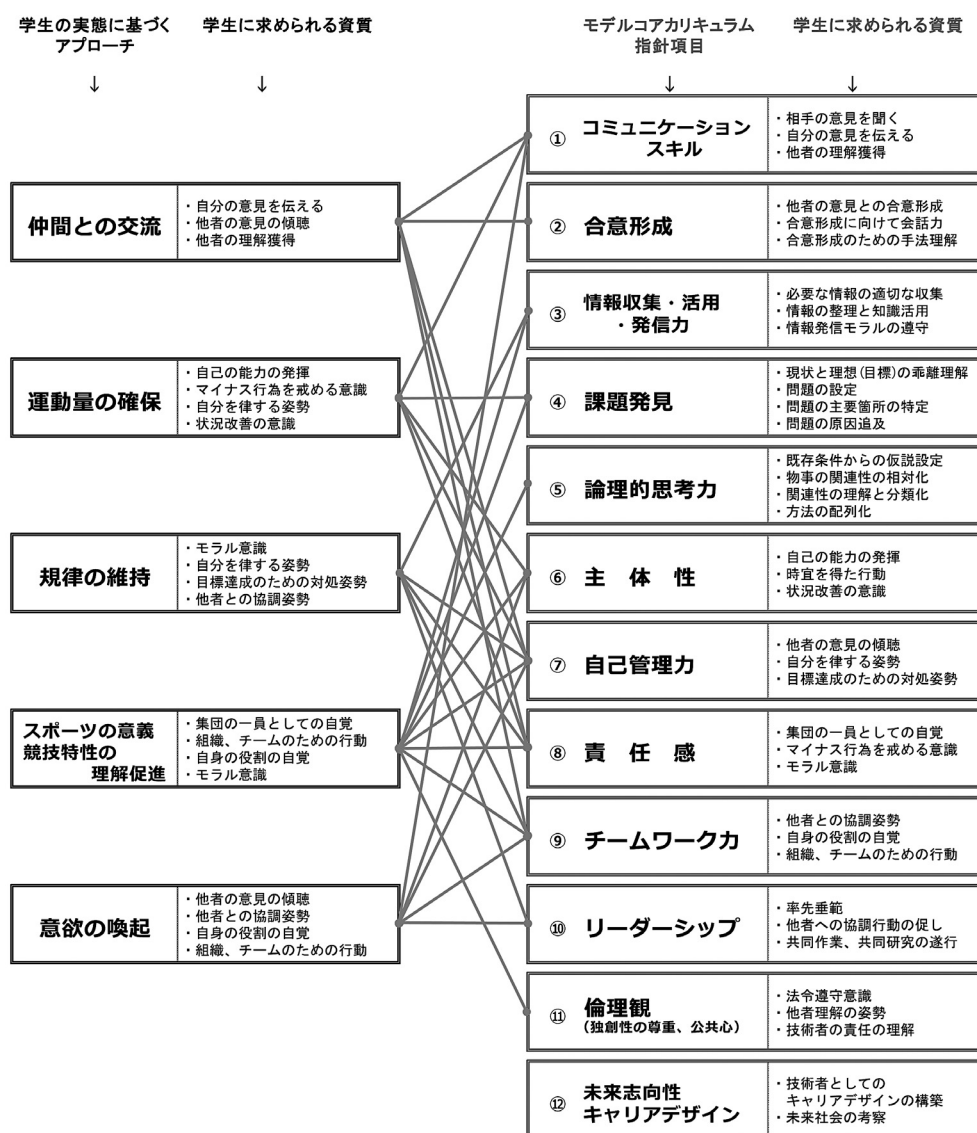


図1 学生の実態に基づくアプローチ項目とモデルコアカリキュラムが示す指針項目との関連図

力・資質は、多くの項目間で、関連性を示すことがわかった。確認された関連性を整理してみると、図1のようにまとめることができる。

関連図に因れば、「コミュニケーションスキル」「合意形成」「情報収集・活用・発信力」「課題発見」「論理的思考力」「主体性」「自己管理能力」「責任感」「チームワーク力」「リーダーシップ」「倫理観（独創性の尊重、公共心）」の11項目が、体育授業において学生に求めることが可能な資質項目となる。

しかし、すべての項目を学生に求めることは、学生の課題意識と指導者側の評価観点を曖昧にしてしまうことが懸念される。また、他教科・他領域において求められる項目を吟味し、教科・領域間のバランスを考慮したうえで、学生に対してわかりやすく提示する必要もある。

体育科の場合、本研究で、学生の実態を受けて項目の整理を進めたことにより、優先すべき項目は絞り込まれたと言ってよい。つまり、関連図において関連性の高い項目、すなわち、関連の多かった項目を優先的にピックアップして提示する。これにより、学生にとっては、受け止めやすい形で求められる資質が示され、明確な課題意識を持つことに繋がると考える。

これらの点を踏まえて関連図から整理していくと、関連が3つ以上見られた項目が、「コミュニケーションスキル」「主体性」「自己管理能力」「責任感」「チームワーク力」である。この5項目が体育科で学生に求めていく資質として、優先して設定する重みがあると捉えることができる。因みに、関連が2つの項目は、「情報収集・活用・発信力」「課題発見」「リーダーシップ」で、関連が1つの項目は、「合意形成」「論理的思考力」「倫理観」である。これらの項目も、体育授業においては、非常に重要な要素であるので、他項目、すなわち、優先5項目に複合的な捉え方で

求めていく。つまり、学生に求める資質項目として明示はしないが、重複する要素を有する項目として求めていく、ということである。「合意形成」は「コミュニケーションスキル」に、「情報収集・活用・発信力」や「課題発見」「論理的思考」は状況改善の意識という観点から「主体性」に、また、「リーダーシップ」は、組織・チームのための行動を求める点で「チームワーク力」に含める。さらに、「倫理観」はモラル意識の観点から「責任感」に含めて考慮する。

(3) 鶴岡高専体育科のアウトカムズ

ここまでの考察から、鶴岡高専体育科のアウトカムズには、モデルコアカリキュラムのガイドラインが示す「主体性」「自己管理能力」「コミュニケーション」「チームワーク」「責任感」といった項目要素を、その内容に勘案することとし、鶴岡高専体育科シラバスの作成を試みる。

その結果を表1に示す。もちろん、この研究で導き出された内容だけでなく、本来、体育科の授業において、学生に求めるべき資質も加えてある。文言は、モデルコアカリキュラムに記されているセンテンスを参考にして、学生自身が理解しやすい平易な表現にして整理した。

また、体育授業においては、バスケットボールやバドミントンなど、実技内容として取り上げる各種目におけるスキルレベルについても評価することが必要である。この点について、鶴岡高専では、シラバス構成上、スキルレベルの評価については、別項で評価欄を設けて、モデルコアカリキュラムを反映させた評価欄とは別に提示することにした。すなわち、体育授業では、高専生として身につけるべき最低限の能力として、汎用的技能や態度・志向性といった「態度面」を位置づけ、その態度面の評価とスキルレベルの評価を併せて体育実技全体としての評価とする。この考え方をもとに、体育科

表1 鶴岡高専体育科シラバス（抜粋）

学習到達目標				
到達目標	汎用的技能	集団における自己の役割と責任を自覚し、合意形成のために他と円滑なコミュニケーションを図ることができる。 自己の能力に気づき、課題意識と向上心を持って努力を積み上げることができる。		
	人間力	集団の中で他者と協調・協働しながら、自己の能力が発揮できる。 集団の一員としての意識を持ち、自らを律して行動し、集団の目標達成のために前向きに対処することができる。		
ルーブリック評価	理想的な到達レベルの目安	標準的な到達レベル	未到達レベルの目安	
	優 (100～81点)	良 (80～60点)	未到 (59点～)	
評価到達目標 (安全・環境管理)	用具準備や後始末を安全に留意して率先して行うことができる。	用具準備や後始末を指示を受けてできる。	用具準備や後始末をまったくできない。	
評価到達目標 (関心・態度)	種目特性を十分に理解し、実技の到達レベルにおいて、概ね意図的に技術の遂行ができる。	種目特性を理解し、実技の到達レベルにおいて、意図した技術遂行はできないがある程度はできる。	種目特性への関心が低く、実技の到達レベルにおいて、基本的な技術遂行がほとんどできない。	
評価到達目標 (コミュニケーション)	相手を理解したうえで、望ましいコミュニケーションが図れ、十分な理解を得ることができる。	集団において自分の意見や考えを伝え、他からの意見に傾聴できる。	他者との関係性の向上に対して熱心に取り組めない。	
評価到達目標 (主体性・自己管理)	ルールやマナー・モラルに高い意識を持ち、自己の持つ能力を常に全力で発揮し、集団に貢献できる。	ルールやマナー・モラルを守り、自己の持つ能力を発揮できる。	ルールやマナー・モラルを守らず、能力発揮の意識が低い。	
評価到達目標 (責任感)	集団の一員として、自らを律して行動し、率先して行動できる。	集団の一員としての意識を持ち、集団の動きに合わせて行動できる。	集団の一員としての意識が持たず、集団と一緒に行動できない。	
評価到達目標 (チームワーク)	集団において他者と協調・協働を意識して、集団の目標達成のために前向きな取り組みができる。	集団において他者と協調・協働して行動ができる。	集団において他者と協調・協働して行動できない。	

シラバスは、態度面の評価項目を強調することとした。

V. 総括

1. 今後の課題

本研究では、鶴岡高専生のスポーツ活動やスポーツに対する意識の実態を分析・把握し、その結果から、体育授業において配慮すべき諸事項を導き出した。さらに、その配慮事項を機構本部が示すモデルコアカリキュラムのガイドラインと照らし合わせ、体育科としてのアウトカムズを設定するに至った。この一連のアプローチは、たいへん有効だったと思われる。特に、あらゆる角度か

ら分析して得られた鶴岡高専生の実態は、今後の体育授業の実践や日常生活において学生に対応するうえでの参考資料として提供することもできる。

しかし、このようなカリキュラムマネジメントも、学生の自主的・自立的な取り組みなくしては、効果をあげることはできないだろう。学生自身が教育プログラムのアウトカムズに対する自分自身の達成状況を継続的に点検し、それをその後の自らの取り組みに反映させていくことが必要である。

2. 今後に向けて～提言

モデルコアカリキュラムが、期待される

技術者養成に関する質保証の機能を果たしていくためには、アウトカムズの到達度を効率的・効果的に評価する方法や、アウトカムズ到達を支援する体育授業の在り方、そして、学生の自主的・自立的な取り組みへ向けた方策、さらに、アウトカムズそのものの点検・改善の仕組みが必要である。

特に、授業の在り方については、授業評価を積極的に行い検証を重ねていくことが重要で、具体的には、教員同士で行うピアレビューや、教員自身の実践記録（ティーチング・ポートフォリオ）等を活用して、改善・向上に向けた取り組みを継続していくことがあげられる。

次の段階では、検証システム構築に向けた取り組みが必要と思われるが、そのためにも、教員自身の自己省察はもちろん、組織において、すなわち、学校内、学校間において、積極的に情報交換を行い、それぞれの成果を散逸させないような動きが重要となろう。

参考文献

- 江刺 正吾 (1980), 学生の生活とスポーツ, 道和書院
- 佐伯 聰夫 (1984), スポーツの文化, 菅原禮編著, スポーツ社会学の基礎理論所収 pp67-98, 不昧堂出版
- 丸山 富雄 (1982), 幼児のスポーツ参加と両親の影響, 仙台大学紀要 vol.14 : pp121-132
- 独立行政法人 国立高等専門学校機 (2012), モデルコアカリキュラム (試案)

